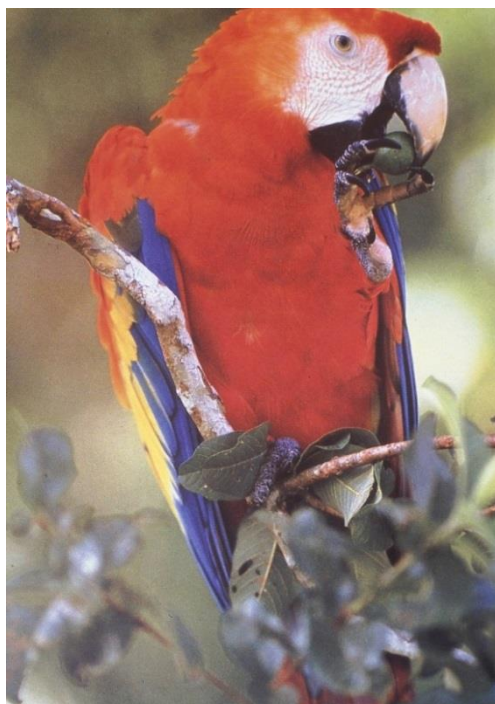


Save The Tropical Forests



森の通信

2014. 6. 10



ベニコンゴウインコ (1989年ブラジルで撮影 西岡)

CONTENTS

- ・People(32) 久世濃子さん……p3
- ・現地報告(石崎)……p4
- ・久世さんの講演……p8
- ・本の紹介「野生のオランウータンを追いかけて」……p11
- ・現地報告(柳原さん)……p12
- ・WALHI アリーさんの講演……p14
- ・生物多様性集会の報告……p16
- ・アマゾンがあぶない……p17
- ・世界の森林ニュース……p18
- ・会計から……p19
- ・エコツアー, 署名運動……裏表紙

今年のゴールデンウィークは念願のフランスに行ってきました。一年で最も季候の良いときで、どこに行ってもきれいな花が咲きほこっていました。南仏のニースからバスで北上を続け、最終のパリまで10日間の旅でしたが、実際はそれ以上に長く感じた旅でした。古代ローマ時代に造られた水道橋(ポンデュガール)やモン・サン=ミ歇尔、そしてヴェルサイユ宮殿にルーヴル美術館等々、フランスが世界に誇る遺産の数々を見学しながら、とても充実した日々を過ごさせていただきました。



しかし、そんなフランスの首都パリでは、現在、大気汚染の問題が広がっています。というのも大気質指標と呼ばれる大気汚染の目安とされる数字が北京と同程度まで悪化する事態となっているからです。ちなみにパリでは、中国で猛威を振るっているPM2.5よりもさらに大きなPM10という微粒子による被害が広がっています。特に今年の3月は、大気汚染が原因とみられる症状で病院に運ばれる人の数が急増したり、ぜんそくなどの持病を持つ人の症状が悪化したりと、日に日に状況が深刻化しました。そこで政府は、急きょパリをはじめとするいくつかの大都市で、週末に公共交通機関を無料化し、車の利用者に公共交通機関を利用するように促しました。

また原発に関して、フランスで現在稼働している58基の原子炉の大半は、1980年代の短い期間に建設されたもので、このうちの約半数は2020年代に設計寿命の40年を迎えます。これは「原子力の崖」と呼ばれていて、フランスは今後数年以内に原子力中心の現在のエネルギー政策を継続するかどうかを決断しなければならない状況となっています。フランス国民の原子力発電に対する支持は伝統的に強かったのですが、2011年の福島原発の炉心溶融(メルトダウン)以降はその支持にも揺らぎが生じているようです。

フランスのオランド大統領は電力に占める原子力のシェアを2025年までに現在の75%から50%に低減して、石油やガスの消費量を削減し、再生可能エネルギーの利用を拡大させる意向を表明していますが、様々な利権がからむエネルギー問題にどこまで手を打つことができるかは大変疑問です。(浅田)

【ウータン活動報告】

- 2014・3・20 上映・講演会[空気を売る村]大阪集会/ゲスト講演・アリ氏(WALHI 中カリマンタン)、中井映画監督/主催/FoE Japan、協賛/ウータンなど
- 3・25 「通信ウータン112号」発送
- 3・30 「オランウータン研究者久世さんを囲んで」講演・座談会
- 4・29 ウータン会議
- 5・1-11 石崎、近藤がインドネシア、タンジュン・プテイン国立公園(TPNP)等へ
- (5/3) WALHI 中カリマンタンと会合
- (5/4-7) TPNP で WALHI、COP、FNPF 等と調査・会議
- (5/10) グリーンピース(GP)・インドネシア事務局長ギンティン氏(*)と石崎ら会合
(*)ギンティン氏はユドヨノ大統領と GP インター責任者を合わせ、森林保護を勧めるよう進言した。

People(31)save! the World's Forests

オランウータン研究者の久世濃子^{くぜのうこ}さんです。



(地上45mの樹上で、オランウータンNOBITAに観察される？久世さん)

前号で紹介した『オランウータンってどんな『ヒト』?』の著者。

オランウータンを追って15年。地上に群れで住むゴリラやチンパンジー研究とは、一味ちがう苦労がある。はるか樹上にひっそり暮らすオランウータンを見つけて観察。落とした食べかすなどを収集する。困難な、忍耐のいる研究だ。

「育児に必要な忍耐は、調査でやってみた」(´o`)とのこと。

生後7か月の娘を連れてボルネオの森での観察に復帰した「つわもの」だ。

人にとっても近いオランウータン。子育て上手で子どもの死亡率はほかの霊長類よりずっと低く、天敵も少ない。

が、鉱山や、油やシプランテーションの大規模開発のため絶滅の危機にある。ヤシの芽を食べる「害獣」として殺されることも。

まだわからないことの多い「森の隣人」の行動に光をあて、共存の道を探る、頼もしい存在だ。

3月30日には講演会をしていただき、大好評だった。(詳細は後のページに)

(井下)

2014年5月インドネシア報告

石崎 雄一郎

5月2日にジャカルタを出発、いつものパンカランプンではなく、中央カリマンタン州都のパランカラヤに向かった。3月に来日講演を行った WALHI 中央カリマンタンの事務局長アリー・ロンパス氏をタンジュン・プティンへ連れて行き、アドボカシーを進めてもらうためだ。到着間際の飛行機から、壮大な森林が広がる景色が見えた。セバングウ国立公園。これほどの美しい森が続くの飛行機から見たのは初めてだったので、つい見とれてしまった。

パランカラヤの空港でアリーさんが待っていてくれ、車で WALHI オフィスへ向かった。バリ・ヒンドゥーの装飾がなされたきれいなオフィスは、比較的若いスタッフが多く、8人が働いている。アリーさんの片腕と思われるキキさんとインドネシア語が堪能な近藤美沙子さん（今回通訳をしてくれてとても助かった）と4人でパンカランプンへと車で向かった。飛行機から見えた壮大な森の風景とは裏腹に、車で行く道沿いにはアブラヤシプランテーションが続く。中央カリマンタン州はパーム油産業を強く推進しているのだ。パランカラヤの空港で目にした看板には「持続可能な農業を！」という文字と共にカカオ、ココナッツなどと並んでアブラヤシの写真が全面に押し出されていた。昼前に出発した車は、結局深夜0時前に FNPF のカリマンタンオフィスに到着した。先に着いていた C.O.P のメンバーと合流。1人は RSPO でオランウータンの着ぐるみを来て BGA の開発反対チラシを配ってくれたリヌスさん、もう1人は同じく RSPO で合ったダニーさんだ。

翌朝起きると、FNPF オフィスの前で、タンジュンハラパン村の有志による新しい苗作りグループ「プリタ・センビラン」の作った苗を売りにいくために、トラックへの荷積み作業が行われていた。売り先はインドネシアの巨大企業 ASTRA。自動車産業等多くのビジネスを手がけるこの企業は、パーム油の取引も多く行っているが、最近では環境への責任を求める声が高まり、CSR として植林も行っているそうだ。1本当たり 4,000 ルピアの苗



を 4,500 本売り、1人当たり 950,000 ルピア（1万円弱）の収入が得られるという。そこから 50,000 ルピア（約 500 円）をそれぞれが出し合って、グループが共同で使う組合の仕組みがとられている。

FNPF は哲学を持っている。BGA 社や他のパーム油企業とは直接一緒に仕事をしない。話しを持ちかけてきても「ノーサンキュー！」だ。しかし、苗作りグループが売る分には何も言わない。彼らは FNPF とは別だから。村人がビジネス・シードで生活向上させることができれば、パーム油産業がなくともやっていけるだろう。

お昼前に WALHI、FNPF、C.O.P、ウータンに OFI のファジャール氏、地元ジャーナリストのラデン氏を交えて、今後の戦略を話し合い、まず BGA 社による開発の現状を共有した。BGA 社は、11 月 21 日から重機の活動をとめている。だが、村人達はアブラヤシの苗作りなどをしながら、開発予定地で働いている。今はグリーンピース等 NGO によるキャンペーンに加え、開発許可の手続き途中なので一時的にとまっているが、開発はいつ始まるかわからない状況だ。1 月には、OFI が、すでに一部が開発されたクマイスンピランでオランウータンを救助した。森が小さくなったオランウータンは行き場を失っているのだ。

BGA 社は、RSPO を通して、問題のある開発はやめて生態系保全にも協力するとの声明を出した。開発予定地には NGO と協力する看板を出しているが、見せかけのグリーンウォッシュかもしれないし、一度開発されればその影響は計り知れない。予定地にはまだ多くのオランウータンがいる。

アリーさんは言う。この状況は難しいが、ゆっくりと進歩をしていけば活路は見出せる。村人はいま生活を向上させてくれる（と思っている）企業に感謝している状態だが、それは一時的なものだ。時を待つのがいい。そのうち幻滅する。一人か二人、プランテーションに対して戦う人が欲しい。しかし、タンジュンハラパン村は親戚関係も強く難しい。いまは「待ち」の状態だ。そのうち問題の多いプラズマ制度（アブラヤシ企業の中核農園の周辺で、参加住民に小農としての農地が与えられる制度）に不満を持つ人が増えるだろう。例えば、現在 BGA 社はジャワの NGO と多く協力して、プラズマ制度について村で説明をしている。人々はプラズマとして土地が与えられ、子どもにいい生活をさせてやれると思う。しかし、プラズマの土地は死んだら企業に返さないといけない。そうしたら、子どものためにもならないし、下手をすれば土地も何もかも失い一文無しになってしまう。村人はそのことを知らない。

彼らは、いつか怒って行動するだろう。それまでに情報を集めて、少しずつ人々に話しをする。キャンペーンを注意深くするが、ゆっくりと、だ。アリーさんはこの後、ジャカルタに行き、NGO や専門家や政府関係者を交えていろいろと話しをする。

たくさん問題がタンジュン・プティンや他の場所でも起こっており、アリーさんはたくさん同じようなケースを知っている。ファジャール氏もたくさん BGA のケースを知っている。戦略は、その時々政治状況などで変わる。来月、本選挙があるが、ローカルの選挙では BGA に近い人間が多く当選してしまった。しかし、いずれプラズマの問題点はでてくる。いまはゆっくりと情報を集め、他の NGO と共有することだ。当事者の村人の様子をじっくりと気にしながら。



OFI オフィスで戦略を練る NGO メンバー達

翌日、話し合いをもとに、森林モラトリアムのエリアにも関わらず伐採が行われたクマイ・セバランの調査を行った。3M以上の棒がささった場所のGPSをモラトリウム地図と重ねると、たしかにモラトリウムゾーンに重なっている。行きと帰りにはBGAの開発計画地で3頭の野生のオランウータンを観た。開発が行われたら、彼らの命は失われるかもしれない。

【アリーさんの戦略】

1. BGAに反対する人々を集める。コミュニティの人々はプラズマの問題をよく知らない。それを説明して、こちら側に付く人間を増やしていく。
2. BGA社に与えられた許可について、森林法、農地法等に照らし合わせてチェックしていく。
3. モラトリウムに違反している部分に関しては、キャンペーンを行う。

晩に、元々BGAで働いていたが今はBGAに反対している村人G.Gが来た。彼の情報は重要だが、大事なのは彼がどうしたいかということだ。話しを聞く。彼は、BGAで7年間PRとして働いていたが問題を感じて、いまはコミュニティの人々と共に反対している。プラズマに関して、長い間、権利を与えられない。たくさんの村のリーダーをまきこんでいる。

G.Gは元々この地域の王族の子孫らしい。たくさんの聖地があったが、BGA社のプランテーションに破壊されたという。今後、BGA社にプラズマの問題への対策の返答がなければ、村人と決起してアクションを起こす予定だ。彼は、ほとんどのBGAのデータ、情報、証拠、すべての情報を知っている。しかし、コミュニティが公正な利益を得るための権利を守ることが優先であって、汚職の立証が目的ではない。オランウータンに似ている彼は、身振り手振りを加えて、よくしゃべる。いろんな真似もする。よほどBGAに思うことがあるのか、たくさんアリーさんに訴えている。彼はどんどん熱く話し、場は笑いが絶えなかった。彼は言う、「BGAはBumitama Gunjana Agroではなく、Batin Gua Aneur（マイ・ハート・ブローケン）だ！」

アブラヤシプランテーションを巡る村人の様々な思い

村人の義理の息子Aさん（別の村に住んでいる）

企業は嘘ばかり付くから、企業が村に入るのはよくない。NGOのほうがいい。プランテーションで働いたら月2万円ほど入るが、炎天下で働くのは好きじゃない。鉱山で働いたが重労働で給料も安かった。ミネラルウォーターや売っている野菜は欲しくない。その辺で採れた野菜のほうが良い。子どもにも添加物の入ったお菓子は食べてほしくないけど、強制はしたくない。この村の小川はプランテーションの農薬が流れているからマンディーをしたくない。



昨年、一昨年のエコツアーで植えた

苗は順調に育っていた。

学校の先生 B さん

BGA 社の開発に反対しようという誘いもあるが、教育の現場にいるので、できればあまり関わりたくない。企業が教育の邪魔をするのであれば反対をするが・・・。2 番目の子を大学にいかせたいのだが、教師の給料だけでは足りない。ただ、お金持ちになりたいわけではない。お金を持ちすぎると心が穏やかでいられないから。

プランテーションで働いている村人 C さん

1988 年 18 歳の時にジャワからカリマンタンに移住して、金鉱山で 10 年間ほど働いた後、この村に移住した。(恥ずかしそうに) 始めは違法伐採をした。その後、10 年くらい前に FNPF が村人を誘ってトレッキンググループを作ったことがあった。テントでキャンプして一泊して帰る 1 回約 1 万円のツアーで、その内グループリーダーが 2500 円、コーディネーターが 2000 円くらいもらえた。最近、初代苗作りグループの「セコニャール・レスタリ」のメンバーとなったが、植えにいったのは 3 回くらい。2 ヶ月前から、BGA に雇われて、奥さんと一緒に働いている。現在、この村では男女合わせて 30 名くらいが働いているのではないかと。現在、プランテーションと森の境界線にオランウータンの食べる実のなる木を植える計画があり、その苗木を探す仕事をしている。

(プランテーションが無かったらどんな仕事をするのか?) それの問題だ。国立公園の中のゲンボル(蚊取り線香の原料や薬になる木)を違法で採らないといけなくなるかもしれない。企業がくれば定職ができるので、そのほうがいい。農業は、かつて FNPF と一緒に村の近くの土地でやったけれど、洪水が二回あり(7年に一回)、それで全部ダメになった。長女、その旦那、孫 1 人と中 2、小 5、小 1 の子どもと暮らしている。今のお金じゃ足りない(BGA の収入は 1 日 74500 ルピア=約 700 円)。奥さんとプランテーションで働きながら、ガハル(沈香)を家に植えようと思う。



それぞれにインタビューをした晩に、FNPF のアドゥと話したが、彼はすべての住民の経歴も考えもよく知っていた。翌日に彼は、BGA と書かれた作業着を来た村の若者と仲良くサッカーをしていたので、僕たちが思っていたほどには、村人間の関係は悪くないのかもしれない。ただ、プランテーション開発の話題はあえて出さないようにしているらしい。彼は、このような小さな問題で村が分割することが悲しいという。とても正直な・・・村に住む若者らしい意見ではないだろうか。人口が 100 人強程度の村にとっては、プランテーションの是非よりも、村人同士の関係性こそが最重要問題である、というのは想像するに難くない。しかし、問題を外野から俯瞰してみた場合、すなわち、この地域が世界で最も貴重な生態系が広がる場所だとして眺めた場合、この問題は全人類的な課題となる。この問いに対する一つの答えとして、「より多様で数多くの、より遠い未来の世代へも残していける『いのち』が最も重要なのだ」と提言することはおこがましいであろうか。

オランウータン研究者の久世濃子さんを囲んで、 鹿肉のお食事とお話を聞く会 in 大阪

記録：浅田聡・橋本友里恵・井下祥子・石崎雄一郎

3月30日に、大阪中崎町にあるケイゾクエナジー事務所にて、オランウータン研究者の久世濃子さんを囲んで、鹿肉のお食事とお話を聞く会を開催しました。現在、国立環境科学研究所



所にご勤務されている久世さんは、多摩動物園、セピロクオランウータンリハビリテーションセンター、ダナムバレー森林保護区でオランウータンの行動・生態を研究されており、現在のメインテーマは「雌の繁殖」だそうです。今回、京都市動物園等での講演を機に関西にいらっしゃったところをウータンでお招きしました。

本の販売とサイン会もあり、売上はすべて寄付していただきました！感激です！

久世さんの講演の様子

久世さんのお話

○オランウータンとは？

・オランウータンは、大型類人猿のヒト科に属し、人間とは遺伝子的に4%ほどしか違いがなく、非常に近い動物です。ある国ではオランウータンをヒトとして認めようという話が持ち上がったほどです。

・オランウータンの保護について、「なぜオランウータンなの？」という人がいます。理由の一つは、熱帯雨林の象徴としてオランウータンが棲める森があり、その森を守ることは、他の多くの動植物を守ることになるということです。もう一つは、オランウータンは6~9年に1頭の子供しか産まず、繁殖に時間がかかり、一度減少すると個体数を回復させるのが困難なことがあげられます。

・現在オランウータンはIUCNのレッドデータ・ブックで絶滅危惧種に指定されています。最も深刻なのは、森林から転換されるオイルパーム農園の増大による生息地の減少です。棲む森が無くなったオランウータンは、オイルパーム農園の苗木を食べ、害獣として殺されることがあります。また、子どものオランウータンをペットとして売るために母親を殺すケースがあります。

・パームオイルから作られる様々な製品は日本でも多く使われ、私たちの生活がパームオイルを通じて、オランウータンとつながっているという話をよくします。対策の一つとして、企業とNGOが集まり持続可能なパームオイル生産、認証制度の確立と普及に取り組むRSPO(持続可能なパーム油のための円卓会議)というものがあります。

○オランウータンの起源

・最古のオランウータンの化石は、200 万年前の中国南部で発見されました。かつて東南アジア全域に 100 万頭以上生息したオランウータンは、マレー半島にもいましたが、最終氷期により生息環境は消失しました。スダンランド時代の古い動物層を見ると、過去 4 万年の間にヒトの分布拡大に伴って、巨大なセンザンコウやバクが絶滅しましたが、大型哺乳類の絶滅もヒトの分布域拡大とによる影響があったと考えられている。

○現在のオランウータン

・現在、ボルネオ島のオランウータンの生息密度は、平均 2.5 頭/km²ですが、昔は 10 頭/km²ともいわれます。オランウータンとの遭遇頻度は、19 世紀半ば～20 世紀に低下していますが、商業伐採や大規模プランテーション開発がない時代に低下した背景には、狩猟圧が大きいかもしれません。オランウータンの生息密度は、ネスト(寝床)の数から推定して求めることができ、他の動物に比べて信頼度は高いと言われています。

・オランウータンは樹上性で、地上をめったに歩きませんが、生息環境が劣化すると地上を歩いて移動する頻度が高くなります。地上を歩けることが、森が無くなってもいいという理由にはなりません。

・2008 年時点でのオランウータンの推定生息数は、ボルネオ島が 54,000 頭で、スマトラ島は北部のごく限られた地域の 6,500 頭のみですが、現在はもっと減少していると考えられます。ボルネオ島の違法な森林破壊、農地のための火入れ、オイルパームの大規模農園開発等による森林減少は極めて深刻で、この勢いが続くとインドネシアでは多くの個体群が 2020 年に絶滅するとも言われています。

・2005 年に推定生息数が 11,000 頭のマレーシア・サバ州では、生息地の分断化や縮小が進むもののオランウータンは生き残るのではないかと予想されています。しかし、現在はすでに伐採した森林を皆伐してオイルパームの農地転換が進んでおり、サバ州に残っている原生林は、州全体の面積の 10%以下にすぎません。ボルネオの原始の森に住むオランウータン、それはすでに幻に近い存在といえます。

○オランウータン保護活動

・オイルパーム、林業、観光業が主要な産業であるサバ州では、62%のオランウータンが保護区外に生息しています。伐採や開発で農地に出てきたオランウータンは、野生生物局のレンジャーにより捕獲され、保護区へ移送されますが、タビン野生生物保護区では、1993 年からすでに 200 頭以上が移送されました。

・久世さんが共同研究を行っていたセピロクオランウータンリハビリテーションセンター(以下、センター)は、1964 年に開設された、最も古い大型類人猿の保護施設です。センターのリハビリテーション事業は、母親を失って、孤児になったオランウータンを人間が養育し、最終的には森の中で自力で生きていけるようにする、というものです。センターでは、オランウータン

の孤児を受け入れています、「1頭の孤児の背景には、5頭のオランウータンが殺されている」とも言われています。

・センターでは、乳児の死亡率が野生に比べ非常に高いそうです。本来、単独で樹上生活をするオランウータンの親子にとってセンターでの集団生活では感染症への感染リスクが高いことや、センター育ちの母親の育児の不慣れも影響していると考えられています。また、人間との距離が近くいため接触頻度が高いことも原因の一つかもしれません。

・リハビリテーション事業での、野生復帰した個体の実績や、センターの一般公開によってオランウータンの魅力と現状を伝え、保全活動の資金源となる一方で、野生個体群を圧迫する、生息地保全がおろそかになる、単なる金儲けだろうという意見もあり、難しい問題があります。しかし、保護されてくるオランウータンが現在も多数いる以上センターを無くすことはできないでしょう。

・毎日100人以上の観光客が訪れるセンターの入場料は、野生生物局が活動する貴重な財源となっていますが、一方でオランウータンの保護のために自分たちの給料よりずっと多くのお金が投入されることに反発する地元の人々の声もあります。これには、センターのマネジメントについても考えていく必要があります。

・サバ州には、保護センターがあり、オランウータンの移送も可能で、2025年にもオランウータンは生息していると考えられています。生息地を守ることが緊急の課題です。保護区への移送やリハビリテーションの他、地元にも利益をもたらすエコツアーや、分断化された生息地をつなぐ「緑の回廊」等、サバ州の事例が、今後の野生動物の保護の取り組みにおけるモデルケースになればと考える関係者も少なくありません。

・現在のオランウータンの分布、生息密度、生態（行動）に関する情報の信頼性など「科学的視点から考えるオランウータンの保全も、生息地の減少を食い止めるために重要となること」でしょう。

[参加者の感想]

*オランウータンにしばって話をきけて新鮮でした。

*オランウータンについて、知らないことがまだまだあったのでとてもおもしろかった。

*楽しかったです。オランウータンとふれあいたい。

*オランウータンの減少の予測、とくにインドネシアでの急減の予測図は衝撃的でした。

インドネシア側での森林保全をなんとか進めないと・・・。どうしたら効果的？

*通史的な話は、観点が開けて良かった。

*生息状況が勉強できてよかった。今後もっと

*科学的数字とか教えていただきよく理解できました。ありがとうございました。

[最後に]

今回、たくさんの方にご協力いただいて無事に会を終えることができました。場所を提供し

てくれた『ケイゾクエナジー』は、「持続可能でおもしろい事を、大阪梅田から、焦らずに色々やっている」プロジェクトです。鹿肉の料理のご協力いただいた『かんえこ』は、環境に興味ある人による、異業種交流会です。差し入れをいただいた、『もったいないを減らし隊』は、関西NGO大学のグループワークから生まれた「廃棄される食材などもったいないを減らしたいの合言葉で集まった」プロジェクトです。

23名とたくさんの参加者がありましたが、みなさん熱心に久世さんのお話に聞き入り、多くの質問も寄せられました。ウータンとしてまたこのような企画を作れたらと思います。

(石崎)

鹿肉のお食事について

メニュー

- ・タンドリーディア
- ・シカの老酒煮（トマト煮込み風）
- ・温野菜と豆乳マヨネーズ
- ・ピクルス
- ・シカと春野菜の炒め物



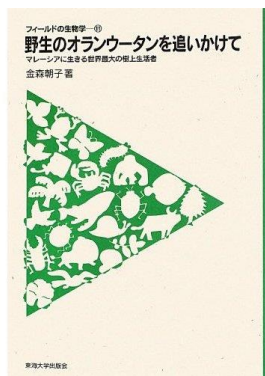
写真提供 下司 聖作

シカについて

三重県で林業被害軽減のために箱罠によって捕獲されたメスジカです。

オランウータンのことをもっと知りたい人へ

「野生のオランウータンを追いかけて」金森朝子著 東海大学出版会



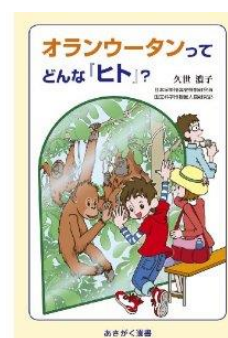
オランウータンについて、だけでなく、著者の生き方や現地の人との交流が描かれている。一人の女性研究者が悪戦苦闘しながらオランウータンを「追いかける」姿は、ディープな動物好きでなくても楽しめる。オランウータン研究志望の学生も、熱帯林での観察の大変さにあきらめることが多いそうだ。共同研究者として、久世濃子さんも登場する。

前号で紹介した久世さんの「オランウ

ータンってどんな『ヒト』？」は、最新の研究成果が読みやすく書かれている。その陰にはこんな苦労があったのか・・・。

人間によって絶滅の危機にあるオランウータン、救うのもまた私たち人間だ。

その手始めに、まず読んでみませんか？



☆久世さんには次号から、記事を書いていただく予定です。お楽しみに！！

タンジュンプティン公園一帯におけるオイルパーム開発について

柳原 里恵

パームプランテーションをめぐるタンジュンプティン国立公園一帯の状況を見て、一年以上が経過する。現地状況は、日本には想像ができないものであり、目まぐるしく変化している。私が知る中では、去年 11 月のミーティング前後に流れの質が変わったのではないだろうか。

そのミーティングは、去年 11 月 26 日に開催された、地方政府関係者と住民、NGO の PT をめぐるミーティングである。FNPF のバスキ氏も参加した。

そのミーティングは異様な様相を呈していた。バスキ氏は、ジャカルタから飛行機でパンランブんに到着。飛行機が遅れたため、途中からの参加になった。空港に到着時、「ミーティングに参加するのは危険だ。」という警察の情報があったが、バスキ氏は会場に向かった。

バスキ氏がミーティング会場のビルに入っていくと、「バスキか？」と聞かれ、「そうだ」と返答したところ、複数名が殴りかかり、警官が止める事態となった。300 人ぐらいのミーティングで、警察が 100 人動員。警官は、会場の周りを取り囲み警護にあたり、会場内ではバスキ氏の後ろでは 5~6 人の警官が護衛する事態となっただけではない。「ブグルにいる FNPF のスタッフは、ブグルから出て行け！」（殺すと言う意味らしい）などの怒号が飛び交う異様な雰囲気だったとのことだ。

ミーティングに出席した村人は、BGA からお金を受け取っているとされており、ハラパンの村人も同様らしい。

こういった、騒然としたミーティングの翌日、FNPF は地方政府と村人とのアグリーメントにサインをせざるを得なくなった。これは、調印しない場合は、FNPF の事務所に火をつけるという情報があり、村人を落ち着かせるため、FNPF にはサインをする以外の選択肢はなかったのだ。ただ、このアグリーメントには BGA がはいっていないため、バスキ氏はそれほど重要なものとはみなしていない。

現在の PT の動向だが。今年は各選挙の年であり、8 月に大半が終わり、9 月には完全に終わる。この選挙があるからこそ、各動向が読めない。つまり、PT は政界と密接に関係しているため、PT 開発の森林伐採は選挙にマイナスのイメージに繋がることで、選挙期間中には開発の温度は下がっていると考えられる。

現在、BGA の活動が止まっているのも、このためだと推測している。選挙の終了を待って、本格的に活動を再開する予定ではないだろうか。BGA の活動は、重機は停止しているが、苗などの手入れ作業は続いていることがそれを示唆していると考えられる。選挙終了直後に、一気に開発が始まるのではないかと危惧する。

選挙終盤の 9 月に向けて、今後、水面下の動きはますます激化すると思われる。去年

の12月ごろ、バスキ氏は、状況が目まぐるしく変化する為、各NGOに提供する情報の取捨選択が非常に難しいと話していた。FNPFから情報が来ないと言うことは、状況が落ち着いている場合もあるだろうが、現在は、非常に混沌とした状況のために情報が来ないと思えるのが妥当である。現場を知らない私たちは、このことを知っておく必要がある。

また、選挙期間中は、選挙にデメリットとなるものは政治的圧力がかかりやすく、不当逮捕や最悪のケースも想像される。また、大きなお金が動きやすい時期であり、人の心が簡単に動かされ、PT内外での寝返りによる事態の急変も予想される。そのため、PT開発の現状は、敵味方の判別が難しい不透明な状況だと考える。

更に、ハラパン村でも、9月に村長選挙が行われる。FNPFと共同で活動しているアチャイ氏が立候補する予定だと聞いている。アチャイ氏は、ハラパン村の2代目村長であり、人望も厚い。現在、パダンスンビレンでハラパン村の森林保全を望む村人と共に活動をしている。仮に、アチャイ氏が村長に当選すれば、ハラパン村も村全体が森林保全の方向へ激変するのではないだろうか。

また、現在、BW PTはグリーンキャンペーンを行っている。選挙の方策か、BWのイメージアップキャンペーンなのか、いずれにしても真の森林保全とは信じがたい。この背景には、去年の夏のBW PT境界付近で発見されたオランウータン死体問題によるイメージダウン。また、今年2月のBW労働者のデモも考えられる。

このデモは、ハラパンのBWの労働者が、PT内において数千人規模で行ったものである。恒例に支給されていたボーナスが支払われないことへの抗議のデモだ。警察と軍隊が、企業内にはいるに至った状況だ。ハラパン近辺のすべてのBWでデモは行われた。さらに、数日後、トラック5台分の他の地域の人々までもデモに加担し、更に、デモは大きくなった。一方、企業に抗議した労働者は、若いオイルパームの実を取ってしまい、6ヶ月間は、収穫ができない状態にしてしまったということだ。つまり、その間、BW PTは収入を絶たれることになったのだ。終には、企業がボーナスを支払うことで終結を見せたいらしい。

インドネシアではデモは一般的ではないが、新聞には報道されなかったと思われる。が、このPT内の一連の動きは、周囲には漏れ知られることであり、今後、他のPT内でも、同様の活動が広がることが予想される。選挙とは別の角度からも、PTの動きを推測することは困難を増してきていると考える。

このように、現在、選挙戦終盤に加え、PT内部の労働者の動向で、ますますPT企業の動きが不透明な状況である。現在の対PT活動は、結果を残せないばかりではなく、政治的圧力などによりNGO自体が足元をすくわれる危険性が高い場合があると危惧する。選挙期間終了までは、対BGAを含め、PTへの大きな動きは非常に慎重に行うことが肝要だと考える。

報告 上映会「空気を売る村」監督&現地 NGO が語る気候変動対策の真実 ～途上国の森を守ってCO2削減、それってほんま?～

石崎 雄一郎

REDD+ (プラス)に関する上映&講演会を、インドネシア・中央カリマンタン州より来日した WALHI のアリー・ロンパスさん、サラワクの熱帯林と先住民を取りあげた「森の慟哭」等、主に人権や環境問題を扱うドキュメンタリーの監督で以前にウータンの集会にもご参加いただいたことのある中井信介さんをゲストに迎え、3月19日にパタゴニア京都、20日にサラヤ本町ビルで行いました。

まずは本上映&講演会を企画した FoE Japan の三柴事務局長から、REDD+についての説明がありました。REDD+は、国連で始まったカーボンオフセットの一種で、「途上国が自国の森林を保全することで抑制される温室効果ガス排出量を国際社会が買い取る」という仕組みで、ウータンでもたびたび取りあげており、Telapakのヤヤットさんにも報告書を作ってもらったことがあります。地球温暖化の原因となる温室効果ガス排出量の約20%は、開発や火災等による森林破壊が原因であると言われ、REDD+による森林保全は、温暖化対策の切り札の一つとしても注目されています。一方で、REDD+の実施現場においては、地域住民の混乱、コミュニティの分裂といった問題や様々な不満の声などが顕在化してきています。

「空気を売る村」では、インドネシア・中央カリマンタン州で実施されている REDD+ のデモンストレーション事業を事例に、対象地域の住民たちの声や、現地 NGO の評価、政府側の見解など、それぞれの立場で見解が異なる様子が紹介されています。事業対象地域の外で依然として続いている違法伐採の様子なども紹介され、途上国における気候変動対策としての REDD+ 事業にどれほどの効果があるのか、気候変動対策のためには先進国がもっと自国での排出削減に取り組むべきなのではないか、とのメッセージで締めくくられています。

上映後に挨拶をした中井監督は「これまで描いてきたような、開発に対して住民が立ち向う悲壮感のあるドキュメンタリーとは違って、お金の翻弄される村人の反応にはコミカルなものさえ感じられる、何ともやりきれない気持ちになる作品となった」とお話しされました。

WALHI のアリーさんからは、現地で活動する NGO としてのお話をお聞きしました。REDD+プロジェクトによって、住民が住む場所を追い出されたり土地が汚染されたりするなどの人権問題や、たくさんの生きものが生息する生態系が破壊されるなどの環境問題が生じているといいます。WALHI は、利益のために開発を進める政府と企業に対して、環境を守るためのアクションを続けています。REDD+だけではなく、アブラヤシ農園開発、鉱山開発、違法伐採と日本の企業、消費者との関係や、はるか昔から森を守るたくさんの決まりと言語やルールをもっている先住民の知恵など、アリーさんの講演内容は多岐にわたりました。



大阪での上映&講演会の様子

5月のインドネシア訪問の際には、ジャカルタで行われた WALHI 主催の REDD+シンポジウムへ参加しました。冒頭、2年前にバスキとジャカルタを訪れた際にゼンジさんを紹介してくれた WALHI 事務局長の Abetnego さんから「REDD+にも色んなプログラムがあるから、本当に有効なプロジェクトかどうか見極めないといけない。先進国から REDD+のために資金だけもらっても、コミットメントがないこともある。」との話があり、続いて REDD+タスクフォースのチーフアシスタント、法律の専門家がそれぞれの立場からお話しました。



REDD+シンポジウムの様子

その後、アリーさんが WALHI 中央カリマンタンの事例から、「森林伐採からの炭素排出を減らすために、排出源に対してだけ働きかけても効果がない。REDD+は住民の経済や文化の 이슈も含んでいる。地域住民の生活を保証しながら、彼らをうまく巻き込むことが必要だ。法の整備も必要であり、プランテーション企業を取り締まる方が炭素排出の削減によほど効果的だ。APL(多用途に使える地域)が増えるとプランテーションが増えてしまう。世界規模の CO₂ 削減を語る前に、ローカルレベルの話ができないと意味が無い。住民と村の代表との間で、コンフリクトがすでに起こり始めているエリアもある。」などのお話をされました。

会場から、WALHI ジャンビの事務局長ムスリ氏が、「先住民から学ぶことの方が多い。現場ではヨーロッパの方法を押し付けられて変なことが起こっている。」と発言しました。

ウータンが以前にヤヤットさんをお願いして作成した REDD+の報告にも、地域住民の視点で REDD+を考えないと、昔から住む住民が土地を追い出されたり、伐採をしていた企業が利益を得たりすることになるという指摘がありました。国連の会議から生まれ、世界レベルで国や企業からも注目される REDD+事業ですが、そこに住む地域住民へどのような影響があるかは NGO から積極的に提言していく必要があると感じました。

日本で行った REDD+上映&講演会は、FoE Japan の呼びかけで、環境市民、京のアジェンダ 21 フォーラム、ボルネオ保全トラスト・ジャパンとの共催で行いました。また、パタゴニア京都、サラヤ本町事務所の協力で会場を提供いただきました。両日合わせて 60 名を超す参加者があり、熱気のある会となりました。今後も、日本の NGO や、WALHI 等インドネシア NGO と連携をしながら、REDD+の問題をおっていきたいと思います。



講演会後の京都観光、大原三千院にて
アリーさんと中井監督

COP12の紹介イベントにウータンは展示部門で参加

春日直樹

生物多様性フェス「コッププルー」 towards CBD/COP12 の開催の情報が入った。生物多様性会議「COP12」が秋に韓国で開催されます。「生物多様性の大切なこと」「多様な生き物を損なわない為の取り組みが大事なこと」を多くの人に知って貰うチャンスです。COP10 後の日本では生物多様性の取り組みが進んでいるのか。どの程度目標達成したのか。『生物多様性を意識して日々の生活を・一刻の猶予もありません』と言うものだった。



生物多様性フェスの参加要請を受けたウータンは、『会報や報告書や写真を展示してウータンの活動を紹介し、8月実施のエコツアー参加のPRをする。』ことで『会員の獲得やエコツアー参加につながるチャンスだ』と考え、4月の事務局会議で生物多様性フェスの参加を決定した。展示にはワン・ワールド・フェスティバルの出展内容を中心にした。(2014年2月開催 会報112号で報告)

今回の展示では、愛知ターゲットの目標5「森林を含む自然生息域の損失をゼロ」・目標12「絶滅危惧種の絶滅を防止」に関連するウータンの取組を紹介した。オランウータンの現状と生息域の変化の事例を紹介した。カリマンタンの多様な自然が破壊され、多くの生き物が絶滅の危機に瀕している。オランウータンも個体数が激減している。野生生物の生活域である森の変化に私たちの暮らしが関わっている。そのことを知ってもらう事が大事だ。



会場では飾り付けと派手な衣装を纏った人が多くみられた。華やかな雰囲気、近くを通行した人が立ち寄ったケースもあった。多様な生物と関わって生活していることを確認し、訪れた人の学びと繋がるの機会になったと感じた。楽しいイベントとなった。

屋内イベントは展示・お話し・歌とバンドの生演奏・ディスカッションの構成であった。主催者の坂田氏が生物多様性とは何か、愛知目標の経緯とCOP10の日本の取り組みを報告した。2014年韓国でCOP12を開催する。愛知目標に沿った各国の取り組みの進捗状況をチェックするという意味合いもある。韓国のNGOと直接つながる機会になる。参加を呼び掛けた。韓国の2名のゲストはCOP12の開催の実務担当の重鎮である。韓国開催の狙いと意義を述べ、参加の意義をアピールした。開発中心の様々な事業を行政・政策は行っている。国は環境に無理解で自然破壊が進んでいる。その事例が報告された。



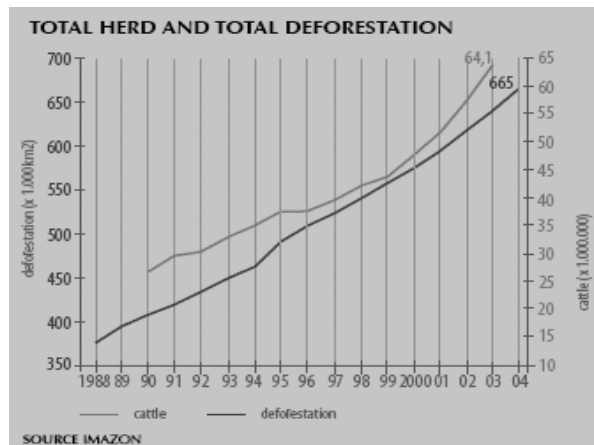
(次号につづく)

『Save!アマゾン』(2) 牧場拡大の停止を!

西岡良夫

ブラジルは2006年から2010年の間、アマゾンの森林減少率を以前の5年間と比べ約半分に抑えることに成功。この結果、森林の広さは5万9000km²。排出を防いだ二酸化炭素の量は22億トンに及ぶ。保全是5年進むも2012-13年は破壊がまた拡大。

2012年の[Rio+20](リオ会議から20年)では、呆気ない幕切れで、全く未熟な森林4項目を含む283項目の文書「われわれの望む未来」に合意。主な首相参加なしの首脳による全体会合を経て採択。「グリーン経済」への移行等の工程表などもあったが、同年1月素案から大きく後退し更に骨抜きの内容となったのだ。牧場拡大停止の案もなければ、違法伐採・密輸全面禁止、森林政策の再見直し・法令遵守等の項目も無いのだ。これではアマゾン破壊は止まらない。私は[Rio+20]会議参加の石崎事務局長に「多分最終1日前に決議がブラジル気質だ」と言ったが、今回2日前に各国にはからず、決議した。下図でも判るように、牧場開発の拡大が森林破壊(太線部)に繋がっているのがわかる。ブラジル政府は、この牧場拡大策の停止や今後の縮小案を一切、2012年1月から本会議まで示さなかった。牧場開発は2004年以降も縮小する傾向にないのに。



1989年に訪れたアマゾンは、首都ブラジリアとベレン、ブラジリア-クヤバ間も拡大に拓がっていた。その当時に比べ、違法伐採は激減した。だが、牧場拡大、道路開発、鉱山開発は全て「善」とされてきた風潮なのだ。強いものが生き残るブラジル。今はマナオスから「未開の地」と言われたガイアナとの間、北部のボア・ピスタまで道路が伸びる。



(写真/牧場の拡大、空からの森林破壊/ロンドニア)



国際林業研究センター(CIFOR)は、「大豆生産も大きな原因だが、最大要因は牛の大牧場の侵略策だ」との報告を2011年に出した。アメリカ、カナダのBSE(狂牛病)、アジアの鳥インフルエンザによりブラジル牛肉の需要が世界で拡大され、アマゾンの熱帯林を加速的に破壊した。ブラジル牛の増加は1990年463万頭だったが、2002年は世界の5700万頭のうちの3分の1(約1900万頭)にあたる。特に増加は、近年森林破壊が著しい南東部マット・グROSSと北部パラ、ロンドニアに集中している。

(次号へ続く)

【GP、フランスの違法木材輸送を発見・告発】

1月8日、グリーンピース(GP)はコンゴからフランスのカーン港へ木材の違法輸入を捕獲。コンゴ民主共和国からの木材で、操業の Sicobois 社は SCB スタンプが押してあった。フランス関係機関から何も対応がないと、GP はフランス政府が EU 木材規則を未実行と批判。また3月、GP は EU 木材法施行にまだ一層の前進が必要と。(資料:グリーンピース・インターナショナル等)

【コンゴ民主共和国の伐採 90%近くが違法】

驚くべき最新報告。コンゴ民主共和国(DRC)の森林は全く管理されていない。チャタムハウスの報告書で、2011年伐採の87%が違法と。(資料: Illegal Logging News 3/14)

【ミャンマーの中国へ違法材停止措置強化を】

昨12月24日、ミャンマー木材エンタープライズ(MTE)は違法材輸出禁止経過を発表。国際 NGO・EIA は同国で 60 億円の木材汚職が蔓延り、中国に違法材が大半輸出と報告。同政府の資料も役人の贈賄蔓延と。3月末日に輸出木材の積込みが全停止としたが、4月初旬に中国へ密輸のシタン等違法木材を押収。(EIA、フェアウッド News)

【EU議会、インドネシアと自主的2国間協定採択】

2014年2月、欧州議会はEUとインドネシアと2国間協定(VPA)決議。木材資源の大半が FLEGT (森林法の施行等)の認証を未取得で、証明無の木材が供給源と流入し、地元民の権利が認められていない等の懸念があると。(フェアウッド News)

【FWI、砂糖農園企業がアル島の森林破壊と】

インドネシアの砂糖農園会社 Pt.マネラ等は同国アルー諸島の天然林を半分まで伐採すると。同諸島も生物多様性が豊富で脅かされていると FWI(フォレスト・ウォッチ・インドネシア)の Abu(アブ)氏からの4月26日のメールだ。

【G購入法木材、約半数が合法性確認出来ず】

FoEJapan 等で「木材・木材製品の調達にあたっての合法性の確認に関するアンケート」を実施し結果を発表。グリーン購入法で合法調達必須も大半の55%未確認と。(FoEJapan5/16ニュースより)

【マレーシア・サラワク州首相 Taib、息子へ交代】

違法伐採を助長し、原生林を著しく破壊し富を得たタイプ・サラワク首相は選挙もせず、後継者を息子にすると。各地 NGO から批判が続く。



(写真:BMF)

【マレーシア環境対策とパーム油販売拡大へ】

日本が95%輸入するマレーシア産につき、環境対策が遅れるマレーシアでパーム油 NGO 連合 (MPONGOC) は、銀行、パーム油協会等に「パーム油産業の社会的・環境基準を向上」と、生産までで森林破壊、社会的紛争を禁ずる政策を採用の広範な活動を取組を要請。一方、同国サラワク州のタン・スリ・ジェイムズ・マシム国土開発大臣は3月、「中東で製品販売を促進する。もっと新市場を探す。今主な買い手は中国、インド、パキスタン、バングラデシュ」と語った。(MalayStar 誌等)

【P&G、パーム油新たな持続可能性目標を設定】

4月 P&G(プロクター・アンド・ギャンブル)社は、パーム油サプライチェーンでの森林破壊ゼロを目指す。また世界最大のパーム企業ウイルマー社は昨年12月長年非難対象となる同社のアブラヤシ供給網から森林伐採を完全に無くす政策を発表。施行されればパーム油産業を一変だが、同社は PT.BGA のパーム油を輸入。(資料:フェアウッド News、グリーンピース・インドネシア等)



<会費・カンパをありがとうございます！>

2014.3.6~2014.5.21

石井雄二 上田廣子 上田真弓 鶉川まき 大西裕子 相楽美穂 須波ヒロ子
田岡めぐみ 千代延明憲 恒成和子 寺川庄蔵 永田健一 熱帯林保護団体・南研子
藤間剛 本田次男 由良行基周 (敬称略)

☆振込用紙をもって領収に代えさせていただきます。

領収書をご入用の方は、お手数ですが振込用紙にその由ご記入ください。

~おたよりから~



御声援、ありがとうございます！

* 森林保護の問題に大変興味をもっております。これまで学生を引率してマングローブ植林を行ってきました。

石井雄二

☺ウータンのエコツアーにもぜひご参加ください！

* よく頑張っていますね。何も役に立てませんが、共感者として応援続けさせていただきます。

* お互い長い支援活動になりますね。私達もアマゾンと25年になります。頑張ってください。

熱帯林保護団体・南研子

* 遺言に「遺産の一部をウータンへの寄付」と加えておきます。

☺ありがとうございます！以前、お父様の「ご霊前」をご寄附いただいた方がありました。私もさっそく遺言に加えます！（長生き家系なので、何十年先かわかりませんが…(^_^;)

☆残念ながら、ウータンへの寄付は、税金の寄付控除はありませんが、現地への支援や事務局の現地への交通費の補助、日本国内での違法材停止活動など、純粹に活動のために使わせていただきます。（事務局メンバーも随分自腹で努力しています）お気持ちのある方は、「未来の世代のための遺産活用」としてご検討いただければ幸いです。

今年はピンチ！地球環境基金の選にもれてしまいました！！

でも活動は続きます。地球も、森も、オランウータンも「金欠やから待ってね」というわけにはいきません。一同がんばりますので、引き続き応援してやってください。お知り合いのご紹介、ボーナスカンパ、ツアーや行事のPRなど、よろしく願いいたします。

ウータン・エコツアー 今年もやります！

8月16日(土)～23日(土)

豊かな森の再生をめざして～感動！ボルネオエコツアー～

このツアーでは、ボルネオの森の現状を見学し、進みゆくプランテーション開発の状況と問題点について学びます。また、インドネシアの NGO、FNPF と失われた森の再生をめざして植林活動を行うとともに、現地の人々と心暖まる交流も行う予定です。

費用は未定です。ご関心のある方は、「件名」に「ウータン・エコツアーの件」とご記入の上、issy@pure.ocn.ne.jp (石崎) までメールください！

インドネシアの森を守るための署名運動に、ご協力をお願いします。

【署名】環境や社会に配慮した「安心して使える」コピー用紙を提供してください！

文具の通販大手であるアスクルがインドネシアで委託生産させているコピー用紙は、多様な生き物が暮らす豊かな熱帯林の皆伐、泥炭湿地の開発による二酸化炭素の大量排出、そして地域住民との間の土地をめぐる深刻な争いなど、その原料の調達で多くの問題を抱えています。

コピー用紙を使うひとりとして、アスクルに「人々から奪った土地でつくられた紙は安心できないこと」を伝えましょう！

▼要請文の詳細、署名はこちら (change.org)

<http://goo.gl/MLzjoE>

▼問題の詳細についてはこちら

<http://www.jatan.org/?p=2927>

ウータン・森と生活を考える会



【OFFICE】〒530-0015 大阪市北区中崎西1-6-36

サクラビル新館308

「関西市民連合」気付

Tel.06-6372-1561

<http://www.hutang.jimdo.com>

【一部】300円 【年会費】4000円

【郵便振替】00930-4-3880

●購読希望の方は郵便振替で申し込み下さるか、又事務所までご連絡下さい。

●ウータン定例会は、毎月、第2、第4火曜日7:00pmより「関西市民連合」事務所にて行っております。